

## 東北日本の低標高山地斜面における周氷河性物質移動の可能性

## Probable periglacial mass-movement in a low mountain peak in northeastern Japan.

# 瀬戸 真之 [1]; 石田 武 [2]; 須江 彬人 [3]; 宮下 香織 [4]; 田村 俊和 [5]

# Masayuki Seto[1]; Takeshi Ishida[2]; Akito Sue[3]; Kaori Miyashita[4]; Toshikazu Tamura[5]

[1] 立正大・地球・地理; [2] 立正大 ORC; [3] 立正大・地理; [4] 立正大・院・地球環境; [5] 立正大・地球環境

[1] Geography, Rissho Univ.; [2] ORC, Rissho Univ.; [3] Dept. of Geography, Rissho Univ.; [4] Geo-environmental Science, Rissho Univ.; [5] Geo-environmental Science, Rissho Univ.

東北日本に位置する福島県御霊櫃峠（標高 900m）付近の山頂部には径 20cm 程度の扁平礫に覆われた風衝砂礫地が分布し、高山のような景観を呈している。本発表では、このような低標高山地斜面の砂礫地における礫の移動プロセスを明らかにするため、気温、地温、風速、土壌水分の観測およびペンキラインによる地表物質の移動観測について報告する。観測は 2004 年冬、2005 年冬、2006 年冬、2007 年冬に行った。気温は通年観測を行い、風速および土壌水分の観測は 2007 年冬からの実施である。2004 年の例では最高気温が 28.8℃、最低気温が -10℃であった。地温は最高値が 25.9℃で最低値は -9.3℃であった。地温のデータから年周期、日周期の凍結融解サイクルを確認した。ペンキラインの観測から礫の最大移動量は 2004 年冬に 50cm、2005 年冬では 100cm と非常に大きな値を示した。2006 年 12 月 2 日には霜柱によって礫が約 2.5cm 持ち上げられている様子を観察した。この時には砂礫地全体の礫がほぼ全て持ち上げられていた。これらの観測、観察からフロストクリープ、ジェリフラクション、テラスクリープなどの周氷河性物質移動プロセスが、この地域の森林限界よりも低い低標高な斜面で局地的に働いて砂礫地が拡大したことが推定できる。